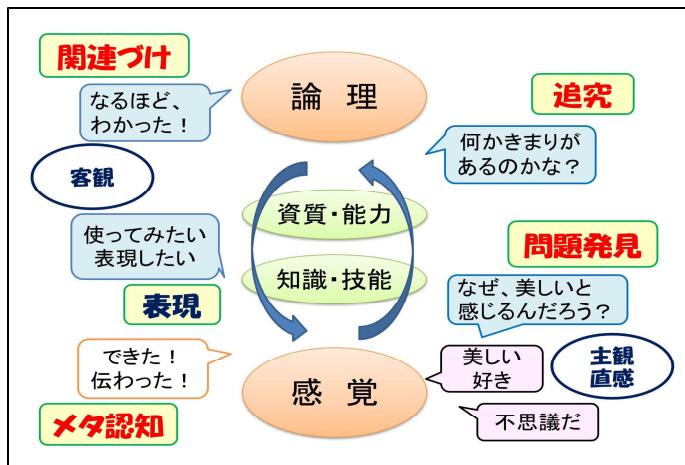


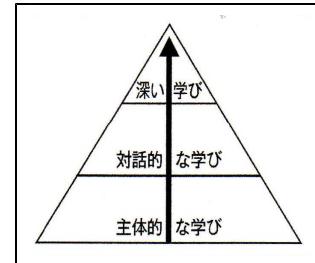
言葉による見方・考え方を身に付けるための国語科授業

筑波大学附属小学校 青山由紀

1. 子どもが「学ぶ姿」のモデル



「授業づくり」では…



◆必要なのは「**たい**」と「**とげ**」
→ 学習者が「**問い合わせ**」をもつ学習者主体の授業

◆青山の「深い学び」の捉え

子どもが本気で追究したいと思う課題に向かい、
対テキスト、対他者（友達）、対自分など様々な対象との対話を通して、
思考し続ける学びの様相
※「深さ」を評価するものでない

◆〈対話〉のタイプ～授業作りで大切なのは【目的】～

【対象別】

テキスト（書き手）との対話
目の前にいる他者との対話
自己との対話

【機能別・目的別】

自分の考えを形成するための対話
思考を拡散・多様化させるための対話
思考を収斂させるための対話

◆求められる授業像

子どもたちが主体的に学び、その過程で言語生活に生きてはたらく言葉の力を身につけ、新たな学びや価値を創造する授業。

2. 「個別最適な学び」と「協働的な学び」

◆中央教育審議会答申（令和3年1月）

「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」

※参考「教育課程部会における審議のまとめ」

○以上の「指導の個別化」と「学習の個性化」を教師視点から整理した概念が「個に応じた指導」であり、この「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念が「個別最適な学び」である。 p.18

…ここでは、ICTの活用と少人数によるきめ細やかな指導体制の整備により、「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念である「個別最適な学び」と、これまで「日本型学校教育」において重視されてきた、「協働的な学び」とを一体的に充実することを目指している。 p.2

○…授業の中で「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、更にその成果を「個別最適な学び」に還元するなど、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげていくことが必要である。 p.19

3. 子ども自らが学びを創るための6つのステップ

- ①自らの学びに対して目的意識、課題意識をもつこと。
- ②目的達成、課題解決のための学習を構想すること。
- ③構想した学習活動の実現のために、具体的な方法で学習を推進すること。
時には、試行錯誤の結果として軌道修正すること。
- ④自分が困ったときに、仲間や教師と協働して、学習を継続すること。
- ⑤学習の成果を仲間に伝え、共有するために表現すること。
- ⑥自分の学びについて振り返り、次の学びにつなげて生かすこと。

「小学校『個別最適な学び』と『協働的な学び』をつなぐ国語授業」 p.1
全国国語授業研究会/筑波大学附属小学校国語研究部編 東洋館出版社 2022年

4. 「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりの条件

- ① 子どもが解決・追究したい課題 → 単元を貫く課題意識・深い学びに向かう課題
 - ★【つかみの課題】→【本質的な課題】→【深める課題】
学習者主体の授業の流れをつくる
- ② 系統的な指導 → 単元同士のつながり、関連付け（活用の仕方を育む）
- ③ 必然を伴った対話
- ④ 思考力の育成（思考の視覚化、思考ツールの活用）
- ⑤ 表現活動・言語活動を組み立てる（言語化する）
 - ↓
 - ・指導と評価の一体化
 - ・言語化のプロセス → 多様な関係性の発見と創造
→ 言葉による「ものの見方・考え方」
- ⑥ 「価値ある問い」を見極める力を備えている
 - ※初発の感想：3段階
 - ・思ったこと、感じたこと、気づいたこと
 - ・個人的、あるいはすぐに解決できそうな疑問
 - ・みんなで解決したい疑問

5. 「問い合わせ」や「考え方」をもたせる手立て

(1) 課題意識の喚起

- ①「題名読み」
- ②予想させる（類推・推測） テキストを途中まで提示し、立ち止まらせる
→ 読みの行為の意識化
- ③気づきを生じさせるきっかけ（既習経験との関連付け）
(視覚的効果…並べる、比べる)

(2) 多様なまとめ（答え）が想定される課題づくり

- ①正解限定型（一対一限定型）……課題に対して正答が限定されている課題。
- ②複数正答型……課題に対して正答が複数ある課題。
例) 『白いぼうし』→『女の子はチョウでないか』と読者が思える『きっかけ』を見つけよう
- ③拡散型……個が自分なりの考えをもち、それらが全て認められるため拡散するような課題。
例) 『ごんぎつね』→最後の2文から分かることは（効果は？）
- ④手立て型……学習のねらいに対して、手立てとなるタイプの課題。（直接的なねらいではなく）
例) 『ごんぎつね』→『『つぐない』はいくつ？』
例) 『プラタナスの木』→「どの描写から、おじいさんは木の精と思われるのだろう」
例) 『固有種が教えてくれること』→『これは大事だと思う資料、ベスト3』を選ぼう」

★【初発の感想から作った問い合わせ】を、確かめ読みの後に検討させる

- ・文章の中に追究するヒントはありそうか
- ・答えにはたどり着きそうにないけれど、他の人の意見も聞いてみたいなど

★「問い合わせ」のタイプ

- ①答えが明確な「問い合わせ」
- ②考えるための「問い合わせ」
- ③創造するための「問い合わせ」

6. <読み方・読みの方略>の系統 ~文学的文章の場合~

叙述や表現に即しイメージ化して読む

①話の筋をとらえる

- ・登場人物（中心人物や対人物といった役割、人物像など）
- ・時の設定（年、月、季節、時間など）
- ・場の設定（場所、場面など）
- ・事件、出来事

低 ↓ • 結末

構造化して読む

②物語構造をとらえる（導入、展開、山場、終末）

(前話・話の設定、出来事の始まり、山場、結末・後話)

③視点・語り手をとらえる

視点人物をとらえる（限定視点・客観視点・全知視点）

④人物の変容をとらえる（何が・どのように・何によって）

中 ↓ ⑤技法とその効果をとらえる（比喩などの表現技法、伏線などの構造上の技法）

書き手の意図を読む（自分にとっての意味や価値を見いだす）

⑥変わらないものをとらえる

⑦主題をとらえる

高 ↓ (人物の変容、構造、視点、表現、題名等、根拠を明らかにして表現する)

◆「目のつけどころ」の系統

低 ↓ ○ [くり返し] に着目する読み方

(盛り上げる効果・最後を強調する効果)

○ [対比的な場面・表現] に着目する読み方

中 ↓ ○ [変容] から主題に迫る読み方

○前話や後話の役割、意味

○ [かぎとなるもの] に着目する読み方

・役割や変容

・「詳しいのにはわけがある」読み方

○題名の象徴性に着目する読み方

○ [つなげて読む] 読み方（伏線）

高 ↓ ○ [変わらないもの] から主題に迫る読み方

心情に迫る表現

①心情表現

②会話文

③行動描写

④心内語

⑤表情や様子の描写

⑥情景描写

【資料1】 「モチモチの木」の実践から

◆ A児のノートより

【少し変わった】…はじめは豆太はおくびょうなだけだったけれど、じさまがおなかがいたくなつた時、勇気のある心をもって医者様をよびに行つたからです。豆太はおくびょうにもどつたけれど、心のそこには勇気をもつていると感じたからです。

↓

【変わった】…最後はもどつたけれど、あまえているだけで、心のそこには勇気があると思ったからです。

◆ B児のノートより

【変わらない】…豆太はさいしょから勇気があったけれど、じさまにあまえていて、大すきなじさまが死にそうなときには、勇気をふりしぶったからです。そして、またあまえていただけだと思います。

↓

【少し変わった】…「おくびょう」と「勇気がない」はちがうと思います。（略）なぜなら、豆太は最初は自分のことを弱虫だと思っていたけれど、じさまのために勇気を出せて神様の祭りも見つからです。また、おくびょうになったけれど、自分は勇気を出せると自信がついたと思います。

【資料2】 「大造じいさんとガン」の実践から ～リフレクションとしての言語活動：インタビュー記事～

◆ A 児のインタビュー記事より

独占インタビュー！

大造じいさん特集（聞き手・A子）

この度は、大造じいさん七十二歳にお時間をいただきました。

◆作戦失敗時の心きょう

A 二回も作戦が失敗したあのとき、どのようなお気持ちでしたか。

大 いてもたってもいられないというか。後で見る目が変わりましたが、やっぱり、いかりの感情が大きかったです。鳥ごとき、ガン一羽なのに、どうしてつかまえられないのかと。その頃は、残雪のことをかなり甘くみていたので、うまくわなを破られたときは感嘆の一言でしたよ。

A おとりのガンをハヤブサから助け出していた残雪をねらったのに、じゅうをおろしてしまったのはなぜですか。

大 鳥を見ているような気がしなかったんです。命をかけてでも仲間を守ろうとする強い意志に圧倒されてしまって。ここでうつかうたないか以前に、残雪の勇気のある行動に感動しました。

A うたなかつた、ではなく、うてなかつた、に近いということですか。

大 はい、そうですね。（略）

A 残雪に対して、今、どう思っていますか。

大 私を成長させてくれた敬うべき存在です。私にとっての英雄です。仲間に何かあろうものなら、命を捨てでもかけつける。そんな心を見習いたいです。

◆編集後記

どういう質問にするか、すごく悩んだけれど、迷いに迷った結果、自分がとくに気になった疑問から三つを選んで載せました。本物のインタビュアーになった気がして、楽しく書くことができました。（略）

◆ B 児のインタビュー記事より

椋鳩十さんにインタビュー

Q なぜ続きがあるような終わり方にしたのでしょうか？

A 最後の場面で残雪を放しました。そのことにより、また大造さんと残雪との戦いが始まります。次はどのような作戦を大造さんはたてるのか、どのようなことをして残雪はそれを防ぐのか。それらを読者さんに想像してもらいたいからです。

Q なぜ、題名を「大造じいさんと残雪」ではなく「大造じいさんとガン」にしたのでしょうか？

A 大造さんの目的はガンをかることで、「残雪」をかることではありません。つまり、ガン全体を相手にしています。よく登場するのは残雪ですが、その残雪もガンの群れの一部であるということでは、他のガンと変わらないのです。

Q 前書きがあるのとないのと、どちらがいいと思いますか？

A どちらもいいと思います。前書きがある場合だと、大造じいさんの家の中でいろいろにあたりながら話を聞いている姿が想像できます。また、前書きがない場合だと、自分が実際に戦いに立ち会い、それらを見ていたような気がします。ぼくはそれら両方が好きですね。

◆ C 児のインタビュー記事より

物語の作者・椋鳩十にインタビュー

Q この物語を書いて、読者に伝えたいことは何ですか？

A 人間に限らず、動物、鳥、全て頭領という強い責任を感じるものは、最後または最期まで戦い続けたり、皆の役に立つように頑張るということを伝えたいです。皆さんも人の役に立ち、皆の上に立ち、頭領としての責任や威厳を感じてみて下さい。